

騰成長した。

ところが十月中旬、やっと入手できた文句廿巻は、全篇に亘り十如実相の色がにじんでいる許りか、その偉容、並に「解題」「解説」に圧倒され、九信一疑は一信九疑に凋落した。無理からぬことで、十如実相はずで千三百年來、中・朝・日三国の無数の学匠に伝承琢磨されてきている。仮に、それが異解誤釈であったとして、今、天台大師が章安・妙楽を左右に従えて再来し、訂正を叫ばれたとて、もはや、どうにもならぬほど三国の仏教界の基盤に定着している——。況んや、誤りかも知れぬというのはいか！私は墜落しながらそんなことをも考えた——。

然し、今、その墜落がきわどい所で停り、そこから下へはどうしても落ちない。見ると大坑の口は岩盤で塞がっている。私の裸足は岩肌にあしかに触れて実感している。私はその岩盤を教相事実と呼ぶことにした。祖師は名字の凡夫の拠所は教相の一字一句にありと云われた。私は今、疑念と信念の乱雲交錯の下に起ちつくしているのだが、口には出さないけれど十如是に関しこうした体験を持つお方は門下に多いと思う。卒直なる意見交換を望みます。(八五・一〇・廿三)

『瑜伽論』菩薩地における

菩薩行

清水海隆

中期大乘仏教における菩薩思想の主要な資料である『瑜伽論』菩薩地が、十三住と七地という対応関係にある二種にまとめられる多種の階位を設定している事を既に確認した。本発表では菩薩思想研究の第二段階として、菩薩地において如何なる行が設定されているかを検討・整理するものである。

さて、菩薩地では三種の菩薩行説示がされている。即ち、第一には初持瑜伽処十八品中の自他利品以下十六品の総撰を菩薩行とし、それを自他利品・菩提品の所学処・力種姓品の如是学・施品・菩薩功德品の能修学に分している。第二には第二持随法瑜伽処の住品所説の十三住が菩薩行を撰するとする。第三には第三持究竟瑜伽処の行品において波羅蜜多行(十波羅蜜)・菩提分法行(三七菩提分法・四尋思・四如实智)・神通行(六神通)・成熟有情行(二無益・成熟有情)を四菩薩行とす

るものである。そして、四菩薩行説示においては「威力品」「成熟品」「如前説」等の語句が散見され、四菩薩行と初持瑜伽処中十六品の説示との対応関係が予想される。

そこで四菩薩行から見た対応関係を考察すると、以下の如くとなる。まず、波羅蜜多行の六波羅蜜は施品、慧品、方便善巧波羅蜜は菩提分品の十二方便、願波羅蜜は同五種願、力波羅蜜は力種姓品（及び建立品）の如来十力、智波羅蜜は菩薩功德品の四種施設建立と対応する。

次の菩提分法行の三七菩提分法は菩提分品の同項、四尋思・四如実智は真実義品の各項と対応する。次の神通行は威力品の六神通と対応する。そして成熟有情行の二無量は菩薩功德品の五無量中の二、成熟有情は成熟品説示と対応するのである。これら対応関係を踏えて三種説示を再考すると、第一は菩薩行項目を多出した菩薩地品々の構成面からの説示、第二は具体的項目配置を欠くが、行果としての十三段階の階位面からの説示、第三は菩薩行の構造からの説示と整理する事ができるのである。

最後に菩薩地の菩薩行中の中心はどこに置かれているかを考察するならば、所説分量という点からは、菩薩地総品数二八本、更には初持瑜伽処十八品中の六品を占

め、内容構造という点からは統一的な九段構造によって整理されている六波羅蜜をその第一とする。六波羅蜜に関して、行品が四菩薩行概説の後に詳説を加えており、また勝又俊教博士稿「中期大乘仏教における菩薩思想の構造論的考察(一)」において、従来の六波羅蜜思想の集大成とされていることから、菩薩地所説の菩薩行としてそれらが重要視されていた事が理解されるのである。

尚、菩薩行各項目と行果としての菩薩の階位との対応関係については、今後の課題とする。

金綱集と真間起請文

山口 晃 一

金綱集は第二祖日向の著作であり身延門流第一の秘書といわれていた。真間起請文は頭本法華宗の派祖日付の書いたものと伝えるもので、現在その「写状」が京都本山立本寺に所蔵されている。

従来この二つは全く無関係と考えられていたが、筆者